

土壌医検定 1 級合格体験記

J A 筑前あさくら営農部営農支援課 中野寛

1、プロフィール

令和元年 4 月、全農福岡県本部(JA 全農ふくれん)より JA 筑前あさくら災害復興対策室へ出向。令和 3 年 3 月定年退職。現在、全農福岡県本部嘱託職員として JA 筑前あさくら営農部営農支援課へ出向中。64 歳。



2、土壌医検定受検のきっかけ

福岡県朝倉市は平成 29 年 7 月、九州北部豪雨により甚大な被害を受けました。被災を受けたのは、農業関係では、特に柿などの果樹農家が多く、こうした農家の経営再建を後押しするため、私ども JA では、当時、新たに災害復興対策室(現在、営農部営農支援課)を立上げ、

J A 自ら認定農業者となり、県の農地中間管理機構を通じて農地の利用権を取得し、そこに栽培用ハウスを建設し、生産者に貸し出すという「J A ファーム事業」を全国で初めて令和元年度よりスタートしました。

このファーム事業で、アスパラガスを進めた令和元年当時、複数の生産者の土壌分析結果を見て、予想しない結果に驚きました。調査した生産者すべての有効態リン酸が 300mg/100g 前後、交換性カリウム 200 mg/100g 前後と極めて高かったのです。それらの圃場は、数年前、すべて、土耕の青ねぎ栽培が行なわれていたこともあり、その当時の施肥・堆肥の影響が主要因であることが凡そ判明しました。

生産者の皆さんからは、有効態リン酸・交換性カリウム値が極端に高いことに不安が高まり、適正值に向けての改善案を示して欲しいという意見が高まりました。災害復興対策室としては、このような問題ある土地を提供した責任があるため、関係機関の担当者が集まり、今後の対策に向けて検討しましたが、当時、有効な対策案が出されませんでした。

私は、この過剰肥料問題は、当 JA 管内だけの問題なのか？と、疑問に思い、県内の他 JA のベテラン指導員を訪ねたり、東京農大の教授など、専門家の皆様の報告書を取り寄せたり、現在の我国産地が抱える肥料問題を総括的に整理した結果、この過剰肥料問題は、けして、当 JA 管内だけの問題ではなく、福岡県内はもとより、全国的に、すべての園芸品目において、品目間差は多少あれ、深刻化していることがわかりました。

県内、他 JA のアスパラガスの 20 年近いベテラン指導員からは、「有効態リン酸や交換性カリウムの値が極端に高い生産者の共通点は、連作障害が早い時期に出やすくなること。特に、栽培 13 年目から極端に収量が低下します。そうなる前に、できるだけ早い段階で生産者に改善策をアドバイスすることが重要です。仮に適正基準値内でも、150mg/100g 以下に抑えるとか、可能な限り、適正值に近づけることが重要です。」と適切な指導を頂きました。

ちょうど、令和 2 年頃から、顕著に肥料価格の高騰が目立ち始め、生産者の

肥料コストに対する関心が一段と高まりました。まだ、有効態リン酸の過剰など過剰施肥に関する一般生産者の認識は全体的に低い傾向にありましたが、こういった生産者の不安・要望・知識向上に可能な限り応え、適切な施肥指導にむけた礎になりたいという気持ちが高まり、土壤医受験を志すきっかけとなりました。

それから1年、私は60歳となり、定年退職をむかえた令和3年3月に2級に合格し、その後4回目のチャレンジで、令和7年3月1級に運良く合格することができました。

2、学科試験(マークシート方式)と記述試験対策

学科試験対策として、毎年11月に開催される1級研修会のテキストと、できるだけ多くの問題に慣れるためにも、過去の既出問題集(2012年以降)を取り寄せました。特に学科試験の微量要素の問題については毎年苦慮していたことと、この分野の出題は年々重点化されていると感じ、必須多量元素と微量元素の17元素については、私自身そこまで細かく学習はできていませんが、1級教科書を熟読し、細かい確認が必要だと思います。記述試験対策については、令和4年2月の1回目の受験では記述試験に慣れてないこともあり、殆ど解答することができず、翌年からは、過去の既出問題集に絞り、予想される出題傾向と解答パターンを自分なりに整理し、反復練習をしました。やはり、慣れるしかないと思います。概ね、試験の半年前から準備を進め、平日・土日、毎日1時間半～2時間程度の時間で、けして多い学習時間ではなかったのですが、毎日、継続してやるのが大きな力になると思います。

3、業績報告書対策

令和4年11月に東京で開催された1級研修会に参加し、土壤協会松本会長より作成の仕方についてわかりやすい説明があり、大変参考になりました。やはり、数年かけて実施した栽培試験を800字以内の報告書にまとめることは容易ではありません。会長が強調されたことは、まず、ストーリーを押さえること。その中で、①問題の摘出(問題の背景) ②対策案 ③実践 ④効果 ⑤技術の確立 ⑥普及、これらの流れを簡潔に明確にまとめること。中でも、印象的だったのは、「試験官も1人の人間なので、長ったらしい説明だと、読んで嫌がる傾向が強いです。そういう気持ちにさせないことが大事です。」つまり、受験者にとっては、英知をつくしてまとめた報告書であったとしても、簡潔に明確で、試験官の気持ちを掴まなければ結果的に認めてくれないのです。

業績報告書の内容を簡潔に紹介しますが、高齢化等による施肥作業の省力化を求める意見の高まり、また、肥料高騰もあり、肥効率の高い「肥効調節型肥料」の活用を進めるため、当JA営農部で令和2年11月に開発した肥料の活用検討をJAファーム事業でアスパラガスを取り組んでいる生産者3名に協力を頂き進めた。(この肥料の特徴は、地温15℃以下でも微生物活性を促進するハイパーCDUを含む。) その結果、今までの栽培概念を覆す結果が得られました。

今まで、アスパラガスの春芽の収量は、前年の貯蔵養分蓄積量によって決まり、春芽出荷期間中は、多肥しても増収はしないというのがアスパラガス産地の通説でしたが、今回の試験結果で、出荷始め(1月)～3月中旬まで出荷量が慣行区に比べ約2割増加することが確認できた。出荷スタート時において、2割増

加すれば、生産者の所得向上のみならず、今後、販売先に対して強力なアピールにつながり、産地として大きな販売戦略となる。肥効調節型肥料はまだまだ園芸品目の中での活用は少ないが、今回の取組みは、将来にむけて大きな飛躍につながると思われます。

4、JA 営農担当職員対象に土壌医研修会を開催

“目指すは農家生産者の所得向上”

近年における肥料価格高騰もあり、生産者の施肥に関する関心が急速に高まっています。関心の高い生産者の中には、土壌医検定資格取得を志す方も増えています。

今後、JA 筑前あさくらでは、土壌医検定の資格取得を通じて、土壌診断や施肥指導など専門家を育成し、農家の生産コスト削減や被災した改良復旧農地での営農再開に向けての指導強化を図ってまいります。

令和 7 年 2 月 9 日の土壌医本試験に先立ち、JA の営農部長より、2 級と 3 級の JA 内部研修会と模擬試験を実施するので協力して欲しいという依頼があり、令和 6 年 10 月 24 日・25 日に福岡朝日ビルで開催された 2 級・3 級研修会に営農部長と私、2 名が受講し、12 月 9 日・10 日には 2 人が講師となり、総数 42 名(2 級検定試験希望者 21 名と 3 級検定試験希望者 21 名)を対象に、2 日間に分け、内部研修会を開催しました。また、本試験 1 ヶ月前の 1 月 9 日には実践さながらのマークシート方式の模擬試験を行ないました。

特に、施肥問題は価格高騰の影響もありますが、どの肥料を、どう使うかが、収量に大きく左右するだけに、生産者の関心が最も高い分野です。

土壌医検定は、JA 営農担当者にとって、農業関係の検定試験の中で最も重要な資格試験の一つであると思います。土壌医検定で得られた知識は、確実に JA 営農担当職員が農家組合員との対応力を高める上で大きな武器になります。

当 JA においては、農家組合員の土壌分析点数は年々増加傾向にありますが、分析結果に基づいた適切な施肥指導がなされるためにも、JA の営農担当者は土壌医 2 級までの取得を目標にさせていただき、知識向上を図っていただきたいと思います。



土壌医 2 級研修会風景（令和 6 年 12 月 9 日、JA 本店会議室）

5、“今、施肥のやり方を再確認し、見直す良い機会”

私ども JA 組織にとって、重要なことは、土壌医検定を通じて知識向上を図り、JA 営農担当職員の的確な指導のもとに農家組合員との対応力強化を図ることです。そして、早い段階で、生産者自身が、自分の圃場ぐらいは自分で施肥設計できるようにならないといけないと思います。そういう知識を JA の営農担当者から指導していただき身につけてもらいたい。

元肥や追肥などの施肥量が、ほんとうに自分の圃場に合った施肥設計になっているか、納得いく確認が必要です。例えば、毎年、元肥で投入している有機配合肥料の量は適切か？ 追肥の量は適切か？ 堆肥の量は適切か？ 疑問に思い、もし改善する必要があるれば、改善するだけの知識を身につけてほしい。多くの生産者に足りないのはこの部分です。

近年、特に園芸品目においては、有効態リン酸や交換性カリウムなどの施肥の過剰問題が全国的に深刻化していますが、結局、施肥のやり方が長年過剰傾向だからこそ問題が深刻化しているわけです。堆肥のやり方も含めて、総括的に再確認し、見直す良い機会だと思います。まずは、生産者をリードする JA 営農担当者の育成がこれからの産地の将来を大きく左右します。